49th Regular Concert

第 49 回定期演奏会

水星交響楽団

指揮：齋藤栄一

2013.09.16 Mon 13:00開場　13:30開演
すみだトリフォニーホール　大ホール

L. バーンスタイン
「プレリュードとフーガとリフ」

M. ラヴェル
バレエ音楽「マ・メール・ロワ」

R. シュトラウス
交響詩「英雄の生涯」

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

おかげさまで当団は、来年（2014 年）は創立 30 周年を迎え、次回の定期演奏会は同時に 50 回目の記念演奏会となります。今回のプログラムは、次回につながる意味もあり、いつにもまして華やかなものとなりました。前半に、かねてから何度もプログラムに取り上げており、当団が最も敬愛する音楽家の一人であるレナード・バーンスタインの若き日の名曲「プレリュードとフーガとリフ」、そして、同じく当団で最も演奏頻度が高い作曲家であるモーリス・ラヴェルのかわいらしいバレエ音楽「マ・メール・ロワ」を、そして後半には、19 世紀から 20 世紀にかけて大活躍したドイツの巨人、リヒャルト・シュトラウスの代表作である交響詩「英雄の生涯」を取り上げます。

しかし、それぞれ非常に個性的な名曲ばかりなのですが、曲自体の知名度の割には、一般的な演奏回数は然程でもありません。それは、オーケストラの演奏会では考えられないようなジャズのビッグバンドを想定した編成を要したり（バーンスタイン）、演奏時間がコンパクトである故か「組曲版」ばかりがなぜかいつも演奏されたり（ラヴェル）、また、コンサートマスター（ミストレス）の 10 分以上にわたる長大かつ超絶技巧を要求されるバイオリン独奏が必要な上に、各楽器のソリスティックな能力に加え、オケ全体の最高水準のアンサンブル力がその前提として当然のように求められる（シュトラウス）などさまざまな理由があるように思います。ですが、これらの音楽はそんな理由などもはやどうでもよいくらいの魅力に満ち溢れており、練習のたび様々な困難はもちろんありましたが、その音楽の素晴らしさに勇気づけられ本番を迎えることができました。

ビッグバンドの形態をとりながらもアドリブなどは実はほとんどなく「プレリュードとフーガ」に「リフ」という今までは考えられなかった形式を融合させたバーンスタインの妙技。おとぎ話の世界をラヴェル一流の繊細なオーケストレーションで紡ぎあげた「マ・メール・ロワ」（特に、組曲では演奏されない「間奏曲」はとりわけ印象的な美しさです）。大管弦楽を縦横無尽に活躍させ「ゴージャス！」としか言いようがない多様な色彩感を表現しつくしたシュトラウス。どこまでその魅力をお伝えできるかはわかりませんが、本日は全力を尽くして精一杯の演奏を致します。

それでは、ごゆっくりとお聴きください。

水星交響楽団　運営委員長　植松　隆治

本日のプログラム

レナード・バーンスタイン
プレリュードとフーガとリフ（約7分）

モーリス・ラヴェル
バレエ音楽「マ・メール・ロワ」（約30分）

リヒャルト・シュトラウス
交響詩「英雄の生涯」（約45分）

指揮
齊藤　栄一
（さいとう　えいいち）

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線　14－17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

水星交響楽団

1984年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成。楽団の名前の由来は諸説あるが、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴーシュの「金星音楽団」から来ているというのが有力。マーラー、ストラヴィンスキー、ニールセン、オルフなど大編成の曲をはじめ、合唱付きの曲にも積極的に取り組んでいる。

リヒャルト・シュトラウスの曲は、1989年に「ドン・ファン」、96年に歌劇「サロメ」より「7つのヴェールの踊り」、98年に「アルプス交響曲」、2009年に「家庭交響曲」を演奏している。バーンスタインの曲は、1991年に「キャンディード序曲」、96年に「管弦楽のためのディヴェルティメント」、97年に「ウエスト・サイド・ストーリー」より「シンフォニック・ダンス」、2002年に政治的序曲「スラヴァ!」、03年に交響曲第2番「不安の時代」を、ラヴェルの曲は、1985年の第1回演奏会で「マ・メール・ロワ」を取り上げて以来、「ダフニスとクロエ」「ボレロ」「左手のためのピアノ協奏曲」「ラ・ヴァルス」「スペイン狂詩曲」など数多くの管弦楽曲を演奏した。

曲目紹介 1

プレリュードとフーガとリフ

Prelude, fugue and riffs

レナード・バーンスタイン　*Leonard Bernstein*

1．曲名について
（あるいは、「リフ」とは何か？）

まずは曲名について考えるところから始めよう。「プレリュード（前奏曲）とフーガ」までなら、ことばの響きとしても非常にまっとうに「クラシカル」。バッハの有名な平均律クラヴィーア曲集が、まさに「前奏曲とフーガ」で構成されていることを思い出す。

ところが、「リフ」となるとちょっと様子が違ってくる。ブルーズとかジャズとかロックとか、ブラック・ミュージック由来の音楽で用いられる概念なのだが、基本的にはギター、ベース、ドラムスなどによるリズム・セクションが「ミニマムなフレーズを執拗に繰り返すこと、またはそのフレーズ」を指す。固定した「リズム・セクション」を持たない「クラシカルな」音楽とはその成り立ちからして相容れない概念である。

すなわち、「プレリュードとフーガとリフ」というタイトルには、バーンスタインがクラシカルな音楽に由来する要素とブラック・ミュージックに由来するそれとを同格に扱おうとしていること、更に、願わくば両者のハイブリッドを作り出そうとしていることが示されていると考えられるのだ。

2．バーンスタインとジャズ

作曲家・ピアニスト・指揮者・教育者など、非常に多面的な才能の持ち主であったレナード・バーンスタイン（1918-1990）だが、1920 年代から 30 年代のスウィング・ジャズ全盛期に青春時代を過ごした若者の常としてジャズには深く傾倒していた。実際、彼のハーバード大学の学位論文は、アメリカ人作曲家として世代的に一つ上に当たるアーロン・コープランドの作品等の分析を通じ、ジャズがアメリカのシリアスな音楽に与えた影響について論じたものであった。すなわち、ジャズは真正のアメリカ的な音楽の土壌として極めて重要である、と考えていたわけだ。

作曲家バーンスタインがジャズとどう対峙したのかを示す例は、彼の作品として最も成功を収めたミュージカル「ウエストサイドストーリー」をはじめとした娯楽用舞台作品はもとより、1949 年に書かれた交響曲第 2 番「不安の時代」の第 2 部 “ 仮面舞踏会 ”、1971 年に完成した大作「ミサ曲」、1980 年の「ディヴェルティメント」の第 7 曲 “ ブルーズ ” など、あらゆる年代に及ぶ数々のよりシリアスな作品においても確認できる。

一方、ジャズについて直接「語る」ことも多かった。有名な「ヤング・ピープルズ・コンサート」のシリーズにも「Jazz in the Concert Hall」と題された回があるが、1955 年に制作された「THE WORLD OF JAZZ」と題された TV 番組こそがバーンスタインのジャズへの見解を知る上で最も重要な手がかりになるだろう。ここでは、様々な音源を交えつつ、時にバーンスタインは自らピアノを爪弾き、歌唱を披露しながら、ジャズとは何かについて語っているのであるが、そこで最も強調されていたのはジャズにおいては「（書かれた）作品」よりも、その場で展開する「（即興）演奏」の方に優位性がある、ということであった。しかし、この認識は「クラシカル」な音楽の「作品」優位の構造とは矛盾を来す可能性があり、「ジャズ」を「作曲」するときにも何かしかのジレンマが生じるのではないだろうか。そんなジレンマについて考える材料こそが、まさにこの曲、なのである。

3．”Hot or Cool？”
（あるいは、1940 年代後半の勢力地図）

さて、バーンスタインがほぼ唯一、最も典型的な「ジャズ・アンサンブル」たるビッグバンドのために書き下ろしたこの曲であるが、委嘱したのはサックス＝クラリネット奏者、ウディ・ハーマン。この曲が作曲された 1949 年当時のハーマン・バンドはクール・ジャズと呼ばれるスタイルで人気を博していた。

クール・ジャズとは、チャーリー・パーカーらのビ・バップ・スタイルへのアンチテーゼであり、マイルス・デイヴィスのアルバム「クールの誕生」を出発点とするが、これを極めて乱暴に整理するなら「演奏されたもの」と同等以上に「作曲されたもの」にも重きを置くスタイルであり、その点において「クラシカルな」音楽の伝統と比較的親和性が高かった。そしておそらくそれゆえに、既に作曲家として一定の成功を収めていたバーンスタインに、ハーマンは自身のバンドのための新作を作曲するよう求めたのではなかろうか。

4．作品について
（ちょっと分析的に）

全体はブラスのための「プレリュード」、サックスのための「フーガ」、全員のための「リフ」の 3 つの部分からなる。

「プレリュード」は急緩急の三部形式。変拍子なども含めややクラシカルな趣もある主部に対し、中間部は極めてブルージーなイントネーションを持つ典型的な 4 ビートのスウィング・ジャズ風の音楽である。

「フーガ」はバリトンサックスの 4 つ打ちから始まる。リズミックな第 1 テーマ（とそこから派生したメリスマ風のエピソード）、カンタービレな第 2 テーマの二つのテーマにより二重フーガ風に展開する。

ピアノのブギウギ風のフレーズで始まる「リフ」。ストレートな 8 ビートの疾走するような空気感の中でクラリネットのソロが吹く上向音型がこの曲のリフである。その後「フーガ」の第 1 テーマ、「プレリュード」の中間部、「フーガ」の第 2 テーマ、などが順次登場し、最後はリフの 5 小節を回数不定でひたすら繰り返して、徐々にヒートアップしていく。

この「作品」の特徴としては、アドリブ風に聞こえるピアノのパッセージを含め全ての音が記譜されていることが挙げられる。すなわち、バーンスタインが「ジャズ」のもっとも肝要な部分と捉えていたはずの「即興演奏」の要素は彼の「作品」からは完全に抜け落ちているのである。どれほどジャズを擁護しようとも、結局のところ彼自身はどこまでも伝統的な意味での「作曲家」であった、ということなのかもしれない。

5．初演の遅延と改訂
（あるいは、初演についての新＝非＝事実）

と、いうことで書き上げられたこの曲であるが、その初演については情報に錯綜・混乱が多々見られる。まず委嘱者ハーマンはこれを初演することなく放置、ついぞ演奏しなかった。こうした中、バーンスタインはミュージカル「ワンダフル・タウン」（1952）の中のバレエ音楽として転用しようと考え、オーケストレーションを変更するなどの改訂を施した。が、このバレエのシーンは全編の完成を前に削除されてしまったとの情報もあり、この「改訂版」が「ワンダフル・タウン」の中で実際に演奏されたのか否かについても、公式情報とは裏腹に全く確証が得られていない。

一方のオリジナル版であるが、公式にはスウィング王ベニー・グッドマンを独奏に迎えて 1955 年に先述の TV ショー「THE WORLD OF JAZZ」の中で初演されたとされている。が、残された映像を確認する中で、そこで演奏されているのがオリジナル版ではなく改訂版であること、ソロがグッドマンではなく、アル・ガロドロ（世界で最も多くラプソディ・イン・ブルーのクラリネット・ソロを演奏したという「伝説」の主）であったこと、などが判明した。すなわち逆説的ながら、オリジナル版の初演が、いつ、どこで誰によって行われたのか全く分からない、という事実が明らかになったのである。確実なのは 1963 年にグッドマンとの顔合わせでオリジナル版によるレコーディングが行われていることのみ。これ以上の詳細については、力及ばず突き止めることができなかった。

（櫻井 統）

曲目紹介 2

バレエ音楽 マ・メール・ロワ

Ma Mère l'Oye

モーリス・ラヴェル *Joseph-Maurice Ravel*

ラヴェルは、１８７５年に、フランス南西部のバスク地方、スペイン国境に近い町シブールに生まれました。本日演奏する「バレエ音楽　マ・メール・ロワ」は、１９１１年、３５歳頃の作品です。

この曲は、もともと「子供の（ための）５つの小品」という副題が付いたピアノ連弾曲として１９１０年に作曲されました。そして、その翌年にそのまま管弦楽に編曲され、さらに同年に「前奏曲」「間奏曲」等を付け加え、原曲と曲順を一部入れ替えてバレエ曲として編曲されました。それが本日演奏する、「バレエ音楽　マ・メール・ロワ」です。

なお、原曲のピアノ連弾曲は、実際彼の友人の２人の子であるミミとジャン（愛称）に捧げられており、小さな手の子供にも簡単に弾けるよう易しく書かれています。曲自体も非常に簡潔でわかりやすく、優しい気持ちになれる音楽です。

「マ・メール・ロワ」という曲名は、フランスの作家シャルル・ペロー（１６２８－１７０３）が民間伝承を子供向けに編んだ童話集（赤ずきん、シンデレラ、眠りの森の美女、青ひげ等を含む）の名前からとられています。「マ・メール・ロワ」を英語で言うと「マザーグース」。マザーグースといえば、英語の伝承童謡の総称として有名ですが、実はこのペローの童話集の方が先で、この「マ・メール・ロワ」の名前をいただいて、１８世紀に入ってから、英語圏の童謡を「マザーグース」と称するようになったようです。

ラヴェルの生地シブールの町役場の庭にちょこんとあるラヴェルの胸像と筆者

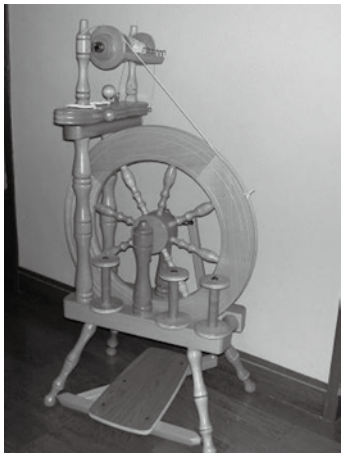
この曲は、「前奏曲」と子供のためのおとぎ話・童話にちなんだ６つの曲、及びそれぞれをつなぐ間奏曲からなっています。順番にご紹介しましょう。

＜前奏曲＞

冒頭、フルートとファゴットによる終曲「妖精の園」のフィナーレを飾るモチーフからこの曲は始まります。続いてホルンによる慎ましくも輝かしいファンファーレ。鳥の声、森のざわめき…。そして、これから始まるお話（それぞれの曲）のテーマ（旋律）が次々に手際よく登場します。再びホルンのファンファーレ、鳥の声。音楽は盛り上がり、そのまま次の曲へ進みます。

＜紡ぎ車の踊りと情景＞

この曲は、原曲のピアノ連弾版には無く、バレエ用の編曲の際に付け加えられました。ペローの童話「眠りの森の美女」の前半で、糸車に指を刺して眠りに落ちてしまう場面。無邪気な主人公を思わせる楽しい音楽が、一転して緊迫した場面に。皆で起こそうとするけど、彼女は起きません！そのまま「眠りの森の美女のパヴァーヌ」へ。



主人公が指を刺して眠りに落ちてしまった糸車

＜眠りの森の美女のパヴァーヌ＞

オリジナルのピアノ連弾版は、この曲から始まります。ラヴェルのピアノ曲の中でおそらく技術的には最も簡単な曲です。テンポも遅いし、そして短い。「パヴァーヌ」は、１６世紀にヨーロッパで広まったダンスのひとつだそうです。「易しさ」と「優しさ」にあふれた音楽です。

＜間奏曲（場面転換）＞

楽譜に書いてあるバレエ用のト書きによると、場面転換のときには２人の黒人の子供がでてくるそうです。狂言回しのような役割でしょうか。そして、舞台上には次の曲名（お話の名前）が書いてある「のぼり」が掲げられます。

＜美女と野獣の対話＞

「美女と野獣」は、ディズニーの映画やミュージカル、あるいはジャン・コクトーの映画で有名ですが、もとは「ボーモン夫人」作の童話です。音楽はまず優美な美女のテーマがクラリネットにより演奏され、続いて超低音の野獣のテーマがコントラファゴットにより演奏されます。次にこの２つのテーマが交互に演奏されて「対話」が始まります。対話は盛り上がり、音楽は高揚し・・・。そして、野獣は、王子様に変身するのです。

＜間奏曲＞

再び２人の黒人の子供が登場し、次のお話の「のぼり」が掲げられます。短い間奏による場面転換。

＜おやゆび小僧＞

これはペローの作品です。貧しい木こり夫婦の７人の子供たち。食べるものがなくなってしまい、両親はやむにやまれず子供たちを森の中に残して帰ってしまいます。賢い末っ子の「おやゆび小僧」は、帰り道の道しるべにパンをちぎって落としていきましたが、それを小鳥たちに食べられてしまい・・・、というお話。この曲を通して流れるうねうねした感じの音楽が、道に迷った子供たちの不安な感じを表します。果たして子供たちは無事家に帰れたのでしょうか・・・。

＜間奏曲＞

この間奏曲では「ハープ」と「チェレスタ」が大活躍します。場面が転換し、一気に東洋、中国へ。しかも当時の西洋人が想像した中国、夢のようなおとぎの国です。

＜パゴダの女王レドロネット＞

このお話は、「緑色の蛇（ドーノワ夫人作）」によるものです。悪い妖精によって世界一醜い女にされてしまったレドロネットという王女が、緑の蛇（実はハンサムな王子）に助けられ結婚する・・・（以下省略）、というお話。場面は、レドロネットが王子の館での生活を始めたときのエピソードで、なんと入浴シーンだそうです。彼女がお風呂に入ると、パゴダ（中国風の首振り人形）たちが踊り出す。そして緑色の蛇（＝王子様・このお話のヒーロー）も、女王様も一緒に踊る（たぶん）。楽しそう！観てみたい！！

音楽は、当時の西洋人が想像する「中国」のイメージを、楽しく、大袈裟に、これでもか、というぐらいに、描き出します。

パゴダ（中国風の首振り人形）

＜間奏曲＞

再びホルンのファンファーレ。そして「眠りの森の美女のパヴァーヌ」のもの悲しい旋律が、ヴァイオリンソロにてここでは長調で奏でられ、彼女が眠りから覚めることを暗示します。

＜妖精の園（終曲）＞

再び「眠りの森の美女」。王子様がそのかたわらに膝をつくと、美女は目覚めました。バレエでは、それまでの登場人物たちが出てきて、２人を祝福します。荘重な音楽から始まり、ヴァイオリンソロ、ビオラソロ、チェレスタの絶妙なアンサンブル。音楽は盛り上がり、最後に前奏曲の冒頭のモチーフが高らかに演奏されます。

（高橋淳）

曲目紹介 3

交響詩 英雄の生涯

Ein Heldenleben

リヒャルト・シュトラウス　*Richard Georg Strauss*

★完全攻略！！「英雄の生涯」のすべて

1．基本編　－まずは概要を押さえよう－

所要時間は約 45 分。楽章の切れ目はなく、全曲通して演奏されます。

ただし、シュトラウスがこの曲のストーリーとして語った話の内容が、伝記や研究書等に採り上げられ、こなれていくうちに、いつしかこの曲は「英雄」の生活と仕事ぶりを中心にその半生を描いた 6 つの部分から構成されるという解釈が定着しました。

部	内　　容		時間
第 1 部	英雄	情熱と覇気に溢れた英雄の登場	約 4 分
第 2 部	英雄の敵	無理解な批評家たちの嘲笑に落胆するが、やがて力強く立ち直る	約 3 分
第 3 部	英雄の伴侶	妻が入ってくる。はじめすれ違うが、やがて打ち解け、めくるめく愛の情景を紡ぎ出す	約 13 分
第 4 部	英雄の戦場	再び敵が徒党をなして攻めてくる。英雄と凄絶なバトルを繰り広げる	約 7 分
第 5 部	英雄の業績	心の平安を得、仕事に没頭した英雄の良き時代を回顧する	約 7 分
第 6 部	英雄の引退と完成	老熟の域に達した英雄が、静かに来し方を振り返りつつ、彼方へと旅立つ	約 11 分

オーケストラはいわゆる 4 管編成(管楽器が原則各 4 本ずつ。ホルンは 8 本)の大規模なもので、全部で 100 名もの人数を要しますが、他の大規模作品とは異なり、パイプオルガン（交響詩『ツァラトゥストラはこう語った』等で使用）とか、ウインドマシン※1、サンダーマシン※2（『アルプス交響曲』等で使用）といった特殊楽器は使われていません。他方で管弦楽法は精緻を極めており、特殊楽器による派手な音響効果がない分、オーケストラの実力がストレートに試されるため、演奏の難易度はシュトラウスの全作品を通じてもダントツと言われています。

さらに、第 3 部『英雄の伴侶』ではヴァイオリンのソロが大活躍します。通常コンサートマスターが担当しますが、このソロの難易度も相当高いために、アマオケがこの曲を採り上げることは極めてまれです。しかし水響は、学生オケでリムスキー＝コルサコフの『シェエラザード』のヴァイオリンソロなどを務め、その後もテクニックの向上に余念のない中里咲子をコンサートミストレスに据えたことで、この大曲にチャレンジできる幸運に恵まれました。時を重ね、妻となり母となり、技巧だけでなく円熟味を増したヴァイオリンソロと、アマオケらしい一期一会的な曲への意気込みが、どのような相乗効果を生むか、本日の最大の聴きどころと言えましょう。

２．内容編　－登場人物とその関係を理解しよう－

「英雄」とは作曲者自身、すなわちリヒャルト・シュトラウスその人であるというのが定説となっています。しかしこれもシュトラウス自身がそう述べたわけではなく、周囲がそのような伝聞や解釈を語り継いでいくうちに定着したもののようです。第５部『英雄の業績』において、過去に本人が書いたさまざまな作品が断片的に次から次へと引用されていて、あたかも自らの仕事の偉大さを誇示しているかのようであることが、その最大の論拠です。

とんでもない自己顕示欲のかたまりのような音楽だと鼻白む向きもあると思います。筆者も、若い頃この話を耳にしてからというもの、この曲はやたら荘重で意味ありげだが、それは一種のごまかしで、薄っぺらな自己満足を派手なオーケストレーションで巧みに塗り固めたハリボテとしか感じられませんでした。

しかし、人生というものは一人ひとりが主人公であり、来し方を振り返るときには当然自分のしたことに意味を見出そうとして振り返るわけです。その意味で、シュトラウスが自作を引用したのは、必ずしも自分の業績をひけらかそうとしたのではなく、ひとりの人間としてごく自然に発想したことだったかもしれません。シュトラウスならずとも、自分の一生がまあまんざらでもなかったと振り返れるのであれば、その人生は他人がどう言おうと「英雄的」だったと言えるわけで、第６部『英雄の引退と完成』の穏やかさは、そのような極めて普遍的かつパーソナルな感情の発露ということもできると思います。

さて、英雄がシュトラウス自身なら、その「伴侶」はパウリーネということになります。パウリーネは、シュトラウスの最初のオペラ『グントラム』に出演し、実力を世に知られたソプラノ歌手でした。大変に感情の起伏が激しかった人のようで、シュトラウスはすっかり恐妻家になってしまったそうです。第３部『英雄の伴侶』では、そんな二人のぎこちないやりとりが描かれます。

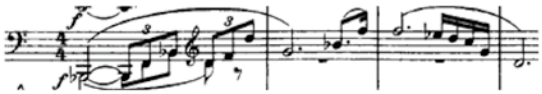
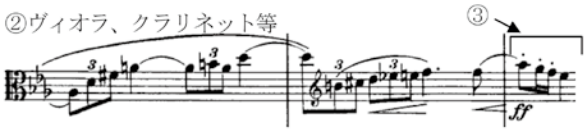
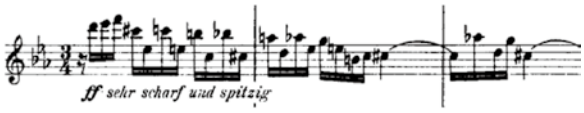
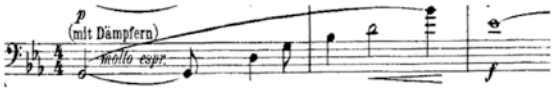
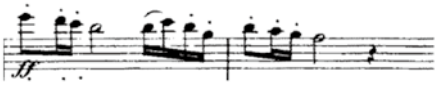
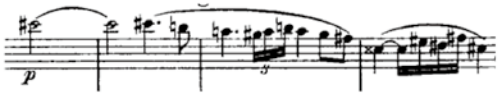
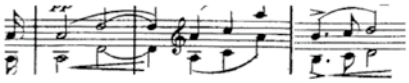
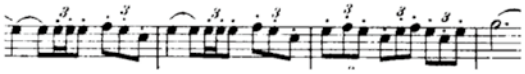
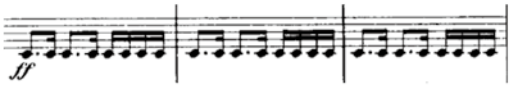
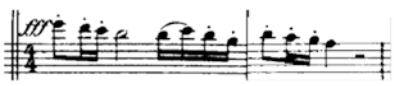
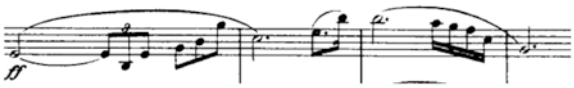
最後に「敵」ですが、ここで明確に想定されている人物がいるわけではありません。シュトラウスの周囲の批判的な批評家や聴衆のことを漠然と指しているようです。第２部『英雄の敵』では英雄を嘲笑するように奇怪な音どもが騒々しくうごめきます。第４部『英雄の戦場』では、第１部『英雄』のテーマと、第２部『英雄の敵』のテーマが激しく絡み合います。

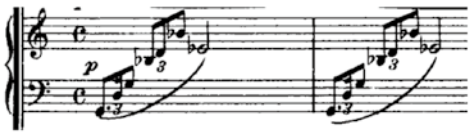
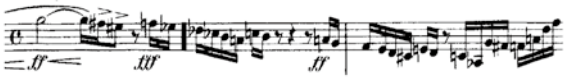
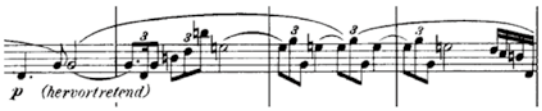
ただし、繰り返しになりますが、英雄をシュトラウス自身と捉えると、この作品は単なる誇大妄想的自伝で終わってしまうように思えます。この世の人間――大切な人（妻）もおり、必ずしも認めてくれない人（敵）もいる中で、悶え苦しみながらアウトプットを出し続け、最後にはそのような人生をまるごと愛して終われるような人間――の誰しもを「英雄」として描いたと考える方が、我々にこの作品を聴く意味を持たせ、前向きな元気を与えてくれるのではないでしょうか。

３．鑑賞編　－音楽の流れを簡単な楽譜と結びつけて確認しながら聴いてみよう－

音楽の流れを表にまとめました。場面と楽器の確認のため、楽譜をつけましたのでお役立てください（音楽的な重要性とは関係ありません。また、スコアの切り貼りのため、調性記号が抜けていたり、移調楽器であってもそのままです。絶対音感のある方はご注意ください）。

◇◇◇

場面	音楽	楽譜
第１部	①低音から一気に３オクターブにわたって駆け上がる、勇壮な英雄のテーマ。これの連なりで、流麗な②や決然とした③の音型が現れる。これらは以後各部に頻出して英雄の所在を示すが、とくに③の「タッタタター」は各部の場面転換の際にたびたび出てくる象徴的な音型。 音楽はこれらの要素が複雑に絡み合いながら盛り上がっていくが、その絶頂で突然断ち切られ、第２部に入る。	①ホルン、低弦  ②ヴィオラ、クラリネット等 
第２部	④批評家や聴衆のけたたましい嘲笑や罵倒が、細かい音のうごめきで示される。すべての木管楽器が好き勝手に動きまわり、楽譜などないのではないかと思えるほど。	④フルート → 各木管 
	次いで現れる⑤弱々しい低音は、①英雄のテーマの変形。批評家たちの攻撃にうなだれる英雄の姿を示す。 ④と⑤が絡み合ってすさまじい罵り合いになるが、だんだん⑤が優勢となっていき、ついに…	⑤チェロ、コントラバス等 
	③「タッタタター」と英雄が勝利の雄叫びをあげ、場面転換。	③全管楽器 
第３部	直後、おもむろに⑦妻が入ってくる。自由自在に立ち回る気まぐれな妻と、おどおどしたり、いらいらしたりしながら受け答えをする⑧夫（この⑧も、①～②の英雄のテーマの変形）が交互に出てくる。 ⑦と⑧はなかなか噛み合わず、言い争いのようになっていくが、やがて結ばれ、壮麗かつ緻密なオーケストレーションで愛の情景をじっくりと描き出していく。壮麗・濃厚・甘美なシュトラウスならではの世界。	⑦ヴァイオリンソロ  ⑧中低音楽器 
第４部	一度は敗走した敵が、⑨ファンファーレとともに今度は隊列を組んで進軍してくる。	⑨舞台裏のトランペット 
	⑩ラヴェルの『ボレロ』を醜悪にしたような３拍子の行進に乗って、④敵、①英雄のテーマが変形し入り乱れる。ときに⑦妻も援軍に入る。 非常に複雑で目が回りそうなオーケストレーション。	⑩小太鼓、弦楽器 
	激しい戦いも英雄の優位は揺るがず、敵が断末魔の叫びを上げたところで、英雄の勝利③「タッタタター」が宣せられ、次いで冒頭の①英雄のテーマが高らかに歌い上げられる。 ひとしきり勝利に酔うと、音楽は次第に沈静していき、次の部へと続く。	③全オーケストラ  ①全弦楽器、クラリネット 

場面	音楽	楽譜
第 5 部	いまや英雄は安寧を得た。英雄のテーマはここでも例えば⑪のように自由に変形され、これに乗って②や③が再登場する。 英雄は仕事に邁進した自分の良き時代を回顧する。さまざまに変形されて現れる英雄のテーマのすき間に、シュトラウスの過去の作品の断片が次々とちりばめられていく(非常に煩瑣となるので、いちいち取り上げません。お詳しい方はご存知のテーマが出てきたらひそかにほくそ笑んでください)。	⑪ハープ 
第 6 部	⑫再び短く激しい音楽となるが、注意すべきは、ここには敵のテーマが出てこず、①英雄のテーマが主に展開されること。敵は乗り越えたが、自らはまだ乗り越えていないことの表れか。	⑫ヴァイオリン、ヴィオラ 
	今度こそ老境に達した英雄。牧童の吹く笛の調べ⑬が聞こえる（これも①英雄のテーマの変形）。	⑬イングリッシュ・ホルン 
	⑭人生の完成を象徴する穏やかな賛歌。 この後、妻を表すヴァイオリンソロと、諦観に満ちたホルンの歌とがかけ合いながら、音楽は次第に薄くなっていく。 金管楽器が夕日の最後の一光を放ち、英雄は彼方へと消えていく。	⑭ヴァイオリン

4．情報編　－周辺情報で知識を豊かにしよう－

『英雄の生涯』における「英雄」がシュトラウス自身だったとしても、この作品はシュトラウスの「生涯」を音楽で綴ったものと考えるのは適当ではありません。なぜなら、シュトラウスがこの曲を作ったのは 1898 年、弱冠 34 歳のときにすぎず、この後も彼は旺盛な創作意欲で作品を量産し続けたからです。

ただし、『ドン・ファン』（1888 年）に始まり、『死と変容』（1889 年）、『マクベス』（1890 年）、『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』（1895 年）、『ツァラトゥストラはこう語った』（1896 年）、『ドン・キホーテ』（1897 年）と続くシュトラウスの「交響詩」の歴史は、この『英雄の生涯』でピリオドを打ちました。

これ以降、彼はオペラの創作に関心を向けるようになり、『サロメ』（1905 年）、『エレクトラ』（1908 年）、『ばらの騎士』（1910 年）、『カプリッチョ』（1941 年）といった傑作を世に出すことになります。

半面、交響曲の分野については、同時代のマーラーなどとは対照的に関心が薄く、ライフワークとはなりませんでした。今日聴く機会のあるのは、『家庭交響曲』（1903 年）、『アルプス交響曲』（1915 年）くらいのもので、2 つとも「交響曲」の定義とはある意味相矛盾するかなり描写的な音楽です。交響詩と銘打ったとしてもまったく問題ないくらいです。

大規模なオーケストラをフル活用して絢爛豪華な音絵巻を繰り広げるシュトラウスの作品は、一見水響向きとも思えますが、俗っぽく大風呂敷を広げたような印象も一部にあって、あまり採り上げる機会がありませんでした。しかしそれでも、過去には『ドン・ファン』（1989 年）、『サロメ』から「7 つのヴェールの踊り」（1996 年）、近年では上記の交響曲 2 曲（『アルプス交響曲』（1998 年）、『家庭交響曲』（2009 年））をともに採り上げるなど、経験値が上がってきています。

そして来年、2014 年はシュトラウス生誕 150 年のアニバーサリーイヤー。水響でも、次回、50 回記念定期で『祝典前奏曲』を演奏します。ウィーンのコンツェルトハウスの落成式のために書かれた、その名のとおり荘厳で華麗なシュトラウスらしい作品です。水響では珍しい同一作曲家の連続採用となりますが、それはシュトラウスが水響において市民権を得た何よりの証拠。今日も、そして次回も、お楽しみいただけると幸いです。　（横地 篤志）

水星交響楽団

◇指揮者
齊藤　栄一

◇コンサートミストレス
中里　咲子

◇第１ヴァイオリン
伊東　陽子
上村　剛正
岡田　紳太郎
亀井　亮子
川原　ひかり
國宗　洋子
小山　吉智
佐塚　有美子
鈴木　牧
永井　翠
◎中里　咲子
堀田　淳子
松田　侑子
宮川　妙子
宮川　雅裕
米嶋　龍昌

◇第２ヴァイオリン
石川　直美
石川　貴隆
岡田　聖夏
織井　奈津乃
黒川　夏実
小林　美佳
鈴木　真由子
高原　苑
土屋　和隆
中谷　華子
西沢　洋
野村　国康
馬場　潤子
◎二島　詩帆
前田　啓
山田　健太

◇ヴィオラ
有井　晶
井上　拓
太田　文二
◎小澤　未来
川俣　英男
木村　納
祐成　秀樹
鈴木　尚志
古屋　圭織
三上　さやか
水上　久美
諸橋　遼一

◇チェロ
足立　啓輔
石黒　万里生
金澤　直人
北岡　正英
小牧　愛
佐々木　晶子
◎首藤　ひかり
高橋　幾多郎
橘　温子
中山　憲一
日吉　実緒
能岡　雅人

◇コントラバス
阿部　洋介
石附　鈴之介
大西　功
◎刈田　淳司
高橋　真弓
野村　美里
増田　晴夫
松岡　和男
丸　陽子
横山　雄一

◇フルート
大平　明香
工藤　美季
佐藤　龍平
本田　洋二
◎横田　慎吾

◇オーボエ
淺井　千栄子
◎齋藤　暁彦
野口　秀樹
長谷川　実里

◇クラリネット／バセットホルン
佐藤　きらら
西村　伸吾
馬場園　真吾
◎藤原　誠明
横地　篤志

◇ファゴット
小田中　優介
木村　駿介
◎冨井　一夫
長谷川　美奈

◇サキソフォン
飯川　陽子
今井　よしえ
岡村　広紀
中野　明
藤原　光弥

◇ホルン
伊集院　正宗
岡本　真哉
島　啓
◎杉本　裕宣
長坂　英里奈
深村　美佳
山形　尚世
山崎　智哉
山城　晴香

◇トランペット
◎岩瀬　世彦
金子　恭江
桜井　新
桜井　詩織
十川　雅彦
大聖寺　将史

◇トロンボーン
小林　威之
櫻井　統
◎佐藤　幸宏
福澤　親

◇テナー・テューバ
佐藤　幸宏

◇バス・テューバ
植松　隆治

◇パーカッション
岸　敦子
鈴木　海里
高橋　淳
◎椿　康太郎
松山　若菜
山本　勲

◇ハープ
東森　真紀子
矢澤　みさ子

◇チェレスタ
高尾　麻衣子

◇ピアノ
西沢　洋

今回お世話になったトレーナーの皆様

木村　康人　　佐藤　雄一　　髙山　健児　　内藤　佳有　　林　憲秀　　三橋　敦

水星交響楽団運営委員会

◇運営委員長
植松　隆治

◇コンサート・ミストレス
中里　咲子

◇弦インスペクター
刈田　淳司
川俣　英男

◇木管インスペクター
横地　篤志

◇金管インスペクター
佐藤　幸宏

◇打楽器インスペクター
山本　勲

◇総務
伊東　陽子

◇ステージ・マネジャー
櫻井　統
平田　信嗣

◇会計
金子　恭江
黒川　夏実

◇楽譜
伊集院　正宗
野口　秀樹
宮川　雅裕

◇運搬
刈田　淳司
山本　勲

◇会場
横地　篤志

◇合宿
椿　康太郎

◇広報
伊東　陽子
岡本　真哉
川原　ひかり
祐成　秀樹
鈴木　牧
土屋　和隆
野村　国康
藤原　誠明
横田　慎吾

◇レセプション
川原　ひかり
首藤　ひかり

水星交響楽団第50回記念定期演奏会

2014年5月5日（月・祝）　すみだトリフォニーホール　13:30開演（予定）

リヒャルト・シュトラウス　祝典前奏曲
グスタフ・マーラー　交響曲第２番「復活」

指　揮　齊藤　栄一
ソプラノ　山田英津子
アルト　小川　明子
合　唱　ソニー・フィルハーモニック合唱団

水星交響楽団ホームページ　**http://www.suikyo.jp**
お問い合わせ e-mail :　**info@suikyo.jp**